御伽比丘尼

注入

別3
5
4

国立国会図書館　タイトル『御伽比丘尼 5巻』 請求記号 本別3-4

ガラス使用

江海

御伽比丘尼序

山梅ちりは中比山媒本腸にさしに清きといへる尼れいまうこのりは利ふ民姓つるかりぞ鹿れ書に心をすゑしてみぬ世の人を友とし。大和前れ心をさしをとけて心ざ向もやさしかりし。志りはわれど幼かりがぶひの心つくし。仏の教を学びて其の家はいうぞ。にあるさ修りの身となり。西海の浪まさぐらひてつかがね船れ何ぐなる世ぞかとひ菊れ比山乃さぐしきにしどりてい屋の知るひは

大正
12. 4. 25
購求

注意尼兄御伽読

国立国会図書館　タイトル『御伽比丘尼 5巻』 請求記号 本別3-4
ガラス使用

書林 [illegible]

[illegible]

貞享 [illegible] 丁卯

仲春 [illegible]

洛下書肆

西村嘯松子序

御伽比丘尼巻之一目録

一 志賀乃浦家 尺八の叟

二 美れかなひ孫 寝屋乃恠

三 わをて悔き文箱 義は恠命

四 女さくらごのり わやなし男

巻之二

一 恠口を埋ハ難し 好物問答

二 祈は鉄の福の神 んの白鼠

三 恨は濡し霧の雨 蔵の心の女鬼

四 問かとしたる渋鶴 恵の濡ゆるこ

五 初恋は東のさえ 東帰乃寝

巻之三

一 菩提は余より遅り仏 怪女のさんぜ喰

二 若眼ぐしの今お酒鏡 絶母の和尚の慈

三 執心の深き業者の海 恵を推ろ告せ

四 狐を雪しの身拭 ふり独が喰呪の粧

巻之四

一 あで洗ぐ女の垢 れたり濡し雪の粧

二 なにはの医師は本性家 誰かり見せん梅の花

三 鹿は人あひのこの奴 一代せち留んなと

四 虚の皮ぶり深の鏡 越中白山のさる

国立国会図書館　タイトル『御伽比丘尼 5巻』 請求記号 本別3-4
ガラス使用

又 ふしぎふ志義なるを 百ものがたり

巻之五

一 名は解まし 血文を 思ひわけ分ん今此

二 ○をとけたる意の粋 元物ものがたり

三 ちひは色に出る場合 恰ふ命ぞたち

四 物言ひ出過雲やぐ 菊の義

同 [illegible]

御伽比丘尼巻之一

一 志賀乃隠家 付り尺八の更

江勿志賀乃さゝは性者乗行 帝 大和の国纏向乃

珠城の宮より出雲より浦し給ひし旧都に詔にて

さゞ所や志ゞの都はあまたあしをと謂しを此事の

事なりしとこゝや志じ事 終りしけるはかひ

此山りに栄のさがそ此志めて世をうろくまたりとん

えし人あり髪をかぶろ而し身ふ白き衣をこのを

ゝり寒美するうち元なん中髪の緒といふべし

や方一号銀の房室に紅塩をうゑ人ぎうの釈迦

りけて恵れ志まく結じ 緒に尺八二髪 [illegible]

国立国会図書館　タイトル『御伽比丘尼 5巻』 請求記号 本別3-4
ガラス使用

其所がたりまでびとをなしべし方丈とりくや房れ和
面に出て浦の名所周の下に幸徳の去かくて乃うし
塩津海津沖田の橋遠く瀬まで行生鳴を霞の
内にさらさらみていとことくとも性来れ旅和平聖
称かりしまさそそれよりべさぐあねさ向げに人の男れ
うしき世乃浪にしづよひ海もとせひ合りにいとゞ常か
きんぬ来て房れ内浪さし祝は僧尼八とりて称とり
しめやのみ吹しぶりにあらりの鳥獣処をやまめ手
足をつゝひて吹ひかさ向りしる顔さへりくなまぐ男もや
しくんをすまして行に此僧尼八をやめてふしぎや此
調子に人の言なひ乃吹ひへ行ながらまま人にやといれの

和をとん出しさりにやれしまりて気に美古ぐれ尾にて
待り此僧れ漁をかの吹法の乃れめでしさるをもれ
りしそんとまうせし行ふ梅をこのくまさるに復居胃ぐらく
こうひへといへは僧打笑よく社来り給へされば人間なる
和に復てんをすまましは源光の出まるにはなしぞ此
市中に立てしん動ざれば所を教なりし此所に
世の中はあるに行せてあれなりわしんまれはあまざりなり
恵さ所と深さ山にのくれてをんくまざれば市中
にもかとり行しんしんを
世を道れ山にいる人
なぐしも誘りされは予れ此尼八にんをすゆしてせ乃

国立国会図書館　タイトル『御伽比丘尼 5巻』 請求記号 本別3-4
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『御伽比丘尼 5巻』 請求記号 本別3-4

ガラス使用

憂をとゞめ事もなくしばらくは天然の妙をもつて此
調子を讃じけるがさぞ〳〵も見聞するにあり今楽器にも尺
八といふ吹ものも此色鳥と飛鳥ありし此河辺尺八を
山で今は音も鳴声を吹くに鶯の鳴ありける色餌を
猿の声あらんかぎりと云ひしに鳥をも迎へて吹しは
ひと川の此ことぞといひつ言はけりしが自ら根ぞよ
かのうぐひすどもくさりはなれて一声ありける猿
木ずゑにたて叫び腸を引き断つがごとし此河辺
猿で世の人いはで猿の鳴く声を聞き絶え給ふ此
さるひと川の上なり雄猿をれく鳴て又後の雌猿を
ゆりかきの子をあつむるにましていつもあり家と

くらゐしは血脈によつて音ひゞくちゞくらむといひければ
中れぐさは憐すぞうし鶏猿もこれを見苦しとぞ我よ
ことをかうしたぬかけなくは侍りしといふめへぬように猿らい
さるさ子を産よのせ妻て血ながれ涙をながしけるにや
か持し呪詛すれば咽の乗ふ鬼ぬ附かれたる猿弟
おもしてりのしまで猿のこゑのうちすぐれかしくを
待しまいて数の人々よれのしとまでゆかんまん
と又尺八もよりも出る声の調子を吹かせばおもしろの音
ともなる河をかしは猿も夜もすがら其源しめ
誘うよ夜の吟を吹かせば景の猿をもちりてさまで音楽
のあと乃笙よりも蝉の鳴声をもいて嫌しむ秋の調子

ねがはしく姫の栄華の夢かなしき世のこれ哀なり
しく竹苑にはおはしませども竹の園生のすゑ
非の宮まで受けて参りし倫も見しわれ今は
うはりけり鷲尾とし定まれる其の色の身ぞよる
御身をしのぶやかりし権威繁栄の国をとんじ樹
下石にかくれて世をのがれたまひ西方浄土の台
を心にかけて生死の苦を一向にわすれ給ひし
御心いとすゞしく見えしけるさまにても浮名の
らするにさふらふ善悪のねはやまはみぐくていとう
さけて見え給へばいとゞ身をして移り行く法の道をを
ゆかしく此のちの世をも思ひよそや侍りぬべしともかく

いかなる人の世を遁給ひけんとかくふかき思ひに入給へれ

㊁ 夢は昔の月 秋やの庭

世よしまづまゝりかゝれ高貴なる上戸のごとく下戸の定
めしある事までも親の思ひ海は奥深くかりなんべし
よ顔はいかにして老を筆ふは濃し密けんとの書
のむかしよりよねの土をば閉て見ぬ人のよそ物語りかゝ
侍を書き置かれけるとぞ縁し秋の月を隅田川の
ほとりの流れを偲ぶ歌は夢のむかし衣のまゝ昔の空は
こはき縁合のごとくせめて心を慰むつゞられ夜よりも
いのちなりし母とこの千とせの月よりかなしくちらゝけ
てんぶ涙をもよほしけれは昔を思ひし西施の姿もよくや

国立国会図書館　タイトル『御伽比丘尼 5巻』 請求記号 本別3-4

ガラス使用

まゐるとす東ごとゝやりぐ其法王民といへる名遠と相業をふ
くまる事は六日ある間王民法皮病家よりは白き狗門
の家居を拵ひして外の人の家内に入て夕へ白衣の姿を
来らやくまゐ来りと多く拵て狗の不為なるすをとさり
皮狗をとらへ数しき肝をとれて冊に採合女にあらへのさ
しむるにちら清浄くなり乃手ゆきをかまりけるとぞ御民
も此故すを能見へてこうくいふるまひ海鹿にさとくはなり

三 あけて悔しき文給 何り 寝命

東海の名遠に禅林寺なり弘法めでたくみえて傍流
多くに小性あまたある中に奉仕の所といふ男色執
とせしにまぐれむうし男の物ならずせし家法物がふき

出さしき毎事をこうくや泰学の寝は蛍を集め雪を
すぐれたまひ老和尚乃かがえ何くれ是よふてのし同し
ち内に其悔とこのやう色執事人あり主子細なりて弓矢乃
家を出行林院といへ頃は毎ごとの伯父なりければ是につ
きて脱性成仏乃心法をまなぶされどやあらぐ乱情の為
おきを老たるのと事たる実さるすぞこのしおるゝ書
たるに毎をうまみてよりちひの男をむひにとき恋はまぐ
らにいつ○を屋しぞやるゝかまさひまゝにちひ死なんを
さまとぐかれば御あ計なりとも志しせどやとちひ入り乃
このげたのむ同着れ給ふとくとこのたれば心やまく
すうきを志め其悔泥なくうれしきあるは待にちひと

のべおく所ハ和哥の文字続つゞきて拍子ごとのひゞき遙り
けるゆへに。唐乃哥を文字数に表はして見せられしが竟より
せうえんなるをもて深きに情識の事を心より又わが朝ハ和哥乃
詞やさしきのびやかにして句のつゞきをかさねつゝかなへ曲のしふ
うく心目は乃妙情識のしぬべきに心身を伝へさせられしせつかくのしう
我斗らそ何そとも説きせぬなれて人がゆくしたひき乃意識を と
真情打ちて何となくやのくんずるくもの語よみくなおもしろく我
うくえ方の道をおもしろく二世うけてさうし侍りしにハ依一筋
ハウえしん唐の歌ゆゑもいふるべくみちうへは当世の分ちや新古が
さらゆかく変じしよへきよ我やいのかくしんたるものにてし
わすれぬと隔絶やうハ情なのしらずして打伝ハめでたきせよんやむど

よ梅ハさゞれしかなれりしく花さく今ハ何をもの包侍りしん我
ハ色香事の歌の数をも祝らふるすゑし歌の虫よすむ
よし古りて朝夕乃禅しへども我が母乃恋しれ詞に文を詠
せめまゞハ歌の自つもきさぶかなし所ぞむしなしく月日を送る
よ侍りし湊神に籠りてこのくま梅ハ花さきて何かなと我つく
て在のしゝハ仙人やそれ梅花のるゝされ仮名りしおもしろへ
て和への歌かみな歌の名ハ竹笔武蔵つ内今ハ
名をとりて隠侍りより為方なきのみ月はよそそとしてへバ
真情なりえとこそ武蔵つハ我が小字しるわりし
ハいかなん孫をもしなし一しうびれよめそりかりせん和哥
をとげさせしゐん今す何のさゝらひがたれんていと好母

一 心ゆ髪斗をもつ勢ゆさぬ山根めでみよりけ見へ山
このくとゆ侍しいので我が望けひ侍しん山ゆらく山
弁へありて二結は
一 さひ歯ゆをなしぞは尺若数抱いくやさく住持ゆは
大小とか独は僧物へ山つかりして結は自筆の帝仙
一 書黒髪いうのくのるへ送りゆは柄ぬは筆の語とや
わりむしよく無しゆと
表の花秋の名葉の一葉ふうき世よりきは飛じる
十月 三月東海さく
毎日書店の女とのく
と申さらか人心一通に帰るもしまつきてみるようひく数

国立国会図書館　タイトル『御伽比丘尼 5巻』 請求記号 本別3-4
ガラス使用

後十久字は切れたれば絶つてゆきさ外ぬおもりの傍出会てす
のやうをゆきよか人かうくと語り我愛ゆきをしりかばりやうに
れ飛び物をし死骸はいぶき付て疑き出しめども御しぞ
命は義によりてかうしたのしらすゆやと名すも
深の神をわしし三更傍続れより葬乃式かどそよ
ゑりぬ三段一七日の又名の命前は押そぶめき流は自害
は及を同宿ども尺牘をとりつきされば和尚も同じよ
しくさあく教訓わうぶし情さうかは大乃秋三日
お愛心してなきさ人の孫又乃為異かぶひどもに一蓮
流生の追者名をうとなし給ひけるか世にしこぶいなき
乃人にして生けるとぞ

(12) 女さうのり付あやなし男

殺乃乾兵器は芳元海和尚の罪其ぞして落湯又墓所
のまひとりなり実常なりぬ世の為しし驚べきにはあら
称ぐられ人三人となく山石は送り捨て燈となるそよ
今更けうとく姓来れ人名の山名かぐ打誦し通り
るは停りこまあるを兵岳山といふ川をむの此は老
称打つどひ遷を安産をまうきてうぶらかぶら乃
中をもいしたるぞ為の前は碎をもしめ心うれては自
この事ぢは御ゆるすを忘れ此はやもひ乃末の一日大師入定
の日とて人々山家は鶴并本ざうれちりとせぞ唱とし
称しぬむのいろ孫はわかぞ御ゆるさは相山兵器は人はぞ

ひてあせきことあざめるまでいりぬてはあるむの水かげを
かりて青純の幕をかゝげ人をみまじ。こゝろをちつ斗か
さゝるとし比の。さをやどしなまさ女を始めてさせ二千
わまりの女房わまらぬ。こゝろやかなれのこゝろ。名人は打ぬいひ
こゝろさ。ゆゑ。くるけき雲のとびて大内女をなぐこといふべしや
こゝろかつきくたがくれ女をかくかゝぬ糀ゆゑしきが
なみめてよにいいとしめやかに酒のえん紙なしぬ。ぬしきや
りし女中に佐の侍仕丁などのみてぬいいでといぶしく
蔵りこゝろ茶柄よりやれしさし。祝ばこゝきしめこゝろ茶柄の者
あど呉の生風にきこゝろえなるぞ下の女の童ちりくる
むよさそふきて宮にしる孫ぬ雲ぞふりけるなどこそふれ

こゝろ又やさしくおなしびこゝろ女のこのくさおそろひていろ
を弾婆に立けめ古へ平乃維城の建きんどがくし山
の女をかくやりしちひ出愧とに孫君にばこゝろ城よりワ
りうど一人出来れり衣服をほくしこゝぞ食をちり
ぞめてむぎにいやしかゝ人といふんぞ佐の奴にわみがさなどやう
の内挽させこゝろが一本のかげの高さよりまくの内ゑんなりし
てあぐらしかさりしくゆびざしてあの天ゆへなる命
なりさしまくせなむ。あるか人どろしきかとの何れつき
ざをとはにいまをもなれすいひちして耳をふきぎ
臭を蔵ふ斗なれば。まくの内より伽羅を送りて。ぐ母
おりひをしてせがれなれどさりあぎをせぞこんざくにさ

国立国会図書館　タイトル『御伽比丘尼 5巻』 請求記号 本別3-4
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『御伽比丘尼 5巻』　請求記号 本別3-4

ガラス使用

てどよみ笑ふ山ぞうしろさんあるは隠れる事このき曇て
青雨しきりは淺まれば自ら是もまた泥になりて一刀雨は
気さりぬげ小女ひとぎにハ男をそのうひしまなりし
気編は海と色とに連つる物うかゝるとぢがりしき風は
いあひかり私ハ女を東丸と説海ハ気そのりなはまごとを
乱はかなげさしてと古し聖を教給ふ物をやはゝしてて
かそ教べき事はとそ

御伽比丘尼巻之一

別 3 5 4

国立国会図書館　タイトル『御伽比丘尼 5巻』 請求記号 本別3-4
ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『御伽比丘尼 5巻』　請求記号　本別3-4